

# 高校で情報モラルをどう教えるか

## ～「教え込む」から「気付かせる」授業実践へ～

How should we teach Internet Safety～ To the teaching practice to make it notice from inculcation～

岡本弘之

Hiroyuki OKAMOTO

京都教育大学大学院院生

聖母被昇天学院中学校高等学校

Assumption High-school

浅井和行

Kazuyuki ASAI

京都教育大学大学院

Kyoto University of Education graduate school

要約：生徒は教員よりも新しいメディアを生かしてコミュニケーションを早くから行っており、その中で成功体験・失敗経験も積んでいる。この経験を共有させることによって、従来の「教え込む」講義形式の情報モラルの授業から、「気付かせる」授業を企画し、生徒が主体的に取り組んだ授業実践について報告する。

キーワード：高校、情報科、授業、情報モラル、情報教育

### 1. はじめに

今多くの中学・高校において、ブログ・メールによるトラブルが急増している。これは筆者の勤務校においても例外ではない。

この現状からも学校教育において、ケータイやインターネットについての情報モラルを教えることは必須であり、高校では情報科がその担当と考えられる。

しかし「モラル」を教えることは難しく、つい「〇〇してはいけない」という禁止表現ばかりの授業や、マイナス面のみを強調するネガティブな一方的な授業になりがちである。

本発表では教師が一方的に「教え込む」授業から、生徒が主体的に「気づき、考える」授業への転換をめざした授業実践を報告したい。

### 2. 情報モラルを授業でどう教えるか？

では実際にどのように授業を組み立てるか。

最初はインターネット上の既存コンテンツ（「ネット社会の歩き方」[1]、「コピーライトワールド」[2]）を使い、一斉提示ではなく生徒が個別にページを見てワークシートに記入させる学習をする等の工夫を試みた。生徒は黙々と取り組み、こんなことがあるという「気づき」にはなったが、「考える」ところまでの意欲は見られなかった。

よく考えれば、生徒の多くは私たち大人よりケータイやブログといった新しいコミュニケーシ

ョン手段を使いこなしており、すでに失敗・成功経験も積んでいる。その経験を共有することからの学びや、「〇〇してはいけない」というネガティブな発想ではなく「賢く活用する」という目標の授業を行い、「ではどうすればいいか」と主体的に考えさせたいと考えるようになった。

### 3. 「気付かせる」情報モラルの授業の展開

そこで実践したのは「メール・ネットの達人」と名付けた授業である。授業の目標は、ケータイ・ネットなど新しい形のコミュニケーションをうまく使いこなす方法を経験から考え、「達人技」という短い言葉で表現することである。

この授業の展開をステップに分けていくと、

#### (1) ふりかえる

新しいコミュニケーションでの失敗体験・うまく使いこなしている体験の両方を自分でワークシートに記入させ、ふりかえらせた。

#### (2) 共有する

自分が書いた経験について発表し、お互いの経験を共有した。

#### (3) 調べる

インターネットを使って、コミュニケーションをめぐるトラブルや賢い利用法を調べた。

#### (4) 表現する

これらのステップで得た「うまく使いこなす方法」を「達人技」として標語・スローガン風の短い言葉でまとめた。

#### (5) 共有する

作成した「達人技」を掲示し、相互にいい作品を投票することを通し、他の生徒が考えた「達人技」に目を通し、そこから気づきを得た。

#### (6) アドバイスを聞く

教員から、「顔が見えない」、「文字だけである」、「携帯ならタイミングも考える」といった新しいコミュニケーションの特性を指摘し授業全体の補足をした。

#### (7) 考察する

今日の授業での気づきを書かせ、自分の振り返りと、教員の授業の目標が達成されたかの評価に利用した。

### 4. 「気付かせる」授業成功のキーワード

この実践で生徒は、成功・失敗事例の中から、主体的に「どのように使いこなせばいいか」を考えることができた。

ここから考える、生徒に「気付かせる」授業成功のためのキーワードは、次の4つである。

#### (1) 経験を共有させる

今回生徒が出した経験では、「自分の写真をブログに載せたら変なメールがいっぱいきた」、「自分の画像を無断で他のサイトに載せられた」、「ブログに悪口を書いたらケンカになった」、「携帯メールの返信が遅れ、無視したといわれた」といった内容が出てきた。

ここから「なぜそうなったのか？」を考えると、まさに情報モラルで教えるべき内容となる。

自分の経験だけでなく、他人の経験を発表により共有することで「気づき」が広がった。

#### (2) 相手意識を育てる

インターネットやケータイを一人部屋で使っても、それらのコミュニケーションの向こうには別の人が存在する。その向こうの相手を意識してコミュニケーションを行うということにも「気付く」ことが必要である。

経験の共有により、受け手・送り手両方の事例を知り、相手意識を育てることができる。

#### (3) 「賢く使いこなす」という発想を

「〇〇してはいけない」という禁止や危険ばかり教え込むのではなく、前向きに「賢く使う方法を考えよう」というテーマで授業を企画してみた。ケータイもインターネットも生徒が便利と考えるゆえに利用している。そこを無視して禁止・

危険性だけを教えても生徒の意識とのギャップが広がるだけである。

#### (4) 知識を得る方法を教える

ケータイやネットをめぐる問題をすべて授業で扱うのは難しい。また教えることができたとしてもさらに新しい問題が発生しているのが現状である。すべての知識を教えるのではなく、「知識を得る方法」を教えることが、実際の社会生活での応用が利き、必要な力となる。

### 5. 今後の課題として

#### (1) 「気づき」だけでは難しいこともある

生徒がある程度実感している・経験している内容なら経験の共有の中の「気づき」から意識を高めることができるが、犯罪のような身近な経験が少ない事例、著作権侵害の様にもととの意識が低い事例については、生徒の経験からの「気付かせる」授業が難しい内容もある。

この場合少し形態を工夫し、生徒に調べさせ、その内容を共有するなど、教師が不足する部分を補足することが必要である。

#### (2) 他のテーマでの実践

ブログがテーマの授業においても同様の実践をしてみた。具体的には、人気ブログのターゲットや工夫を分析させ、そこでの「気づき」を使って、「もし学校がブログを作るとしたら、誰に対してどのような情報を載せればいいのか」ということを考えさせてみた。これも、「悪口の温床となるからとブログを禁止する」方向ではなく、「賢く使うにはどうすればいいのか」という発想である。

### 6. まとめとして

モラルは「知っている」だけでなく「実践できる」ことが大切である。そのためには習うだけでなく、「自分がどうすればいいか」を主体的に考えさせる授業が大切である。今後も実践を重ね、情報モラルを実践できる人間を育てていきたい。

<参考>

[1] 「ネット社会の歩き方」

(<http://www.cec.or.jp/net-walk/>)

[2] 「コピーライトワールド」

(<http://www.kidscric.com/>)